

粘土造形作家

まえだ あきこ

前田 明子さん



プロフィール

1954年、大阪市生まれ。大学卒業後、静岡県
の企業内高校の国語科教師兼寮母として就職する
も1年後に家庭の事情で帰阪。会社勤めを経て
79年に結婚、退社。36歳で外反拇指手術のリハ
ビリ中に粘土細工を始め、ネコをテーマにした
作品で評価を得る。市内各図書館でのケース展
示が始まったのは91年。03年には尼崎市で第1
回個展を実現し、NHK「おしゃれ工房特番・
手づくりパンゼイ」出演も。図書館のほかギャ
ラリーや百貨店に出品するなど活躍中。



柔らかい粘土にさわると、 気持ちまでやわらぐのです

市立図書館のエントランスやロビー
などで、粘土で作ったネコたちのオブ
ジェをご覧になったことはないだろうか。
この「ネコたちの世界」の作者が前田
明子さん、粘土造形作家である。

前田さんが、粘土のネコを作りはじ
めたのは14年前のこと。外反拇指を
悪化させ、手術後もギブスをはめるな
ど、治療とリハビリで不自由な日常を強
いられていたころだ。

たまたま、小学生だった娘さんが部
屋に置いていた粘土に気付き、粘土
いじりを始めた。「すごく気持ちがなご
みました。泥遊びをする感じで、癒され
るし、楽しくて」。最初の器づくり^{うつわ}に次
いで挑戦したのが、「いつもそばにいる
ネコのコンペイ(編注 オス。昨年21歳
で大往生)をモデルにした、ネコづくり」
だった。

作品は、単体のネコに留まらず、ス
トーリー性を持つ「ネコの世界のお話」
へと広がっていく。「昔は童話や小説
も書いていましたので、文字のかわり
に、ネコでお話を作れないかと」思考を
重ねた結果だった。

デビュー作は、「リハビリ中よく本を
借りに行ってお世話になった」という住
吉図書館にプレゼントした、返却日を
知らせるボードだった。「 日が返
却日です」の表示と日付の数字を入れ
る枠があり、10センチほど張り出した板
の上に、粘土細工の本棚やカウンター
が並び、本を借りるネコ、返しに来たネ
コなどがある図書館の風景を表現し
たものだ。

この作品が評判を呼び、やがてケ
ース展示が実現。さらに口コミで他の
図書館からも出品依頼が相次いだ。
粘土造形作家の誕生である。

作家への「下地」は、実は幼少時代
にあった。幼稚園入園から小学2年生
まで通った近所のアトリエ。若くてユニ
ークな洋画の先生がいて、絵や工作を
習った。新聞紙と洗濯のりで粘土を作
り、油絵の具を手足につけて壁に塗り
たくった。だが、あまりのユニークさが、
「それ以降の、学校の美術の授業と隔
たりがありすぎて(笑) 中学、高校も美
術とは無縁だった」という。つまり、30
年前の学習の記憶が、「ふとしたこと

をきっかけに、よみがえったのでは」と。
最近はその「30年ぶり」という絵筆で、
ネコの似顔絵の制作もはじめている。

ギャラリーや百貨店の催事などにも
出品しているが、市立図書館での展
示会は年間10回程度に及ぶ。「図書
館は、招待状やDMなしで老若男女
だれでも入れます。図書館で作品を
見ていると、その作家がギャラリーで
やる時に行きやすいですね」。また
「その逆もあり、図書館とギャラリーと
の見学者の交流が実現しています。
これは、作家、見学者はもちろん、施設
側にとってもすばらしいことです」。

現在は、谷町4丁目のギャラリー・セ
ンティニアルで2回目の個展「ようこそ
猫の国へ2004」を開催中(5月14日ま
で)。将来は「病院の小児病棟や老
人ホームで、ボランティアの作品展示
や粘土教室を開催したい」と奔走中
だ。「柔らかい粘土を触ると、ストレス
解消にもなり、気持ちもやわらぎますか
ら」。

(文・脇本勤 / 写真・高島悠介)